白 黒　ーもう一つの存在ー

究極神団・零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白　黒　―もう一つの存在―

【Ｎコード】

Ｎ９０７５Ｕ

【作者名】

究極神団・零

【あらすじ】

これは、理想と真実が交わるもう一つの物語――

（前書き）

ども、執筆の合間に書いた短編です。↑いや本編書けよ
これから書かれる注意書きをよく読んでからお進み下さい。

※今度は妄想５００％のみで出来ております。

※最後の方にそういう事を仄めかす文章が表現されております。

※ポケモン×ポケモンです。

※どんなポケモンかはあらすじを見れば分かります。

※現在連載中のものとは何一つ全く関係ありません。

※文章力は何時もと同じ低駄文です

以上の項目を踏まえまして、オーケーな方は先にお進み下さいまし。
以上の項目がオーケー出来ない、低駄文なんて読みたくない、作者が個人的に嫌い（↑）な方は回れ右をお勧めします。

それでは、オーケーな方は……どうぞ！

ここはポケモン達が住む場所……から少しだけ離れた、山の奥の谷の奥のそのまた更に奥……。
そこではある二人のポケモンが住んでいて――

「ゼークロムッ♪」
「のぁっ！！」

いきなり白い身体のもふもふした大きな龍――レシラムが黒い身体のつやつやした大きな龍――ゼクロムに勢いよく、抱き着いた。勢いが強すぎたのか、ゼクロムはその勢いに乗って背中から地面に激突した。

「いてて……。急になにすんだよ。」
「なにって、ゼクロムに抱き着いたの♪」

ったく……。と呟きながら、身体を起こすゼクロム。でもその表情を見ると、まんざらでもない様子。

「ゼクロム～、遊ぼ～」

そう言いながら、ゼクロムの身体をゆさゆさと振るレシラム。

「遊ぶたってなぁ……。」

そう言って、外を見るゼクロム。つられてレシラムも外を見る。外

を見ると、ザァザァと結構な勢いの雨が降っていた。

「外は無理ｄ――」

「僕はゼクロムさえいてくれたらそれでいいよっ」

その言葉を聞いて吹き出すゼクロム。レシラムは笑顔でゼクロムをずっと見ている。

「え、あ、お、おぅ……。」

気が動転してか、変に言葉が詰まって曖昧な返事をしてしい、妙な空気がその場を支配する。

「と、とにかくだ。遊ぶんだろ？」

「うん♪なにして遊ぶかはもう決めてあるんだっ♪」

「……へ？」

そう言うとおもむろに立ち上がり、何かを取り出すレシラム。

「ポ〇モンだよ♪」

「いやいやいやいや、それ色々とダメだろうが。まず隠す意味ねぇよ！」

ごもっともである。ポケモンであるレシラムとゼクロムがポケモンのゲームをして遊ぶというのだから。

「いいからいいから♪」

「良くねぇから！」

そのまま強引にやらされるゼクロム。充電が切れるまでやらされた

といふ。

「……雨あがんないね。」
「だな……。」

もうやることもなく、ただぼーっと雨空を眺め続けるレシラムとゼクロム。にらめっこやしりとりなど、色々やったが、やはりすぐに飽きる。そうしてやることを殆どやり終えてしまい、何もすることがないのだ。

「お外で遊べたらなぁ……。」
「無闇に天候を変えたらダメだしな……。自然に過ぎ去るのを待つだけか・・・。」

暫くの静寂。聞こえるのは雨の降り注ぐ音と、二人の息遣い。規則正しく息遣いが聞k――

「…すー……。」
「って寝てるしっ！」
「ん～…むにゃむにゃ……。」

幸せそうな顔で、規則正しい寝息を立てながら眠るレシラム。そんなレシラムをみて、ゼクロムはただただ苦笑い。

「……ま、いいか……。」

起こさないようにレシラムを抱き寄せ、頭を優しく撫でる。

「ふにゅん……。」
「変な声だな…。」

とは言いつつも、その表情は優しいものだった。

「んにゅ……、ぜくろむ……だいすきだよぉ……。」
「！……うん、寝言だ。寝言。」

寝言と一人言い張り、レシラムから顔を反らす。だがその顔は、とても赤く染まっていて、どこか嬉しそうだった。

「んゆ……ふぁぁ……、あれ……？　僕寝ちゃってた……？」
「ああ。それもぐっすりな。」

外は闇に包まれ、夜の世界。光の珠と呼ばれる道具を使っているので、今二人のいる洞窟からは明るい光が漏れていた。

「ゼクロム、」
「んぉ？」
「……これはどういう状況？」
「……あ」

簡単に言い表すと、今現在ゼクロムが膝枕中。

「こ、これはだな、その……」

「……ん。」

「ちょ！？」

あたふたして言い訳を考えているゼクロムの首に、手翼を回して、抱き着くような形をとるレシラム。ゼクロムはそれに対して更に慌てる。

「……全部わかってるよ。こうしたかったんでしょ……？」

「……。」

恥ずかしいからか、黙って首を小さく縦に振る。

そしてそのまま、また暫く静寂が続く。

それから数分――二人にとっては数十分――が経った頃、ふとレシラムが口を開く。

「……ねぇ。」

「……なんだ？」

「ゼクロムは……僕の事、好き？」

「ッ！　ど、どうしたんだ急に……？」

急なレシラムの言葉に、動揺を隠して問うゼクロム。

「……実は最近ね、ゼクロムの事考えると、胸が熱くなるんだ。それでね、最初はこれがなんなのかわからなかったの。でもね、今はっきりしたの。僕はゼクロムが好き。大好き。ただ好きなんじゃない。この世界中で、誰よりもゼクロムが大好きだって事に。」

「レシラム……。」

淡々と語ったレシラムだが、その顔はとても真っ赤に染まっていた。

「……だからね、僕――」

「昔の話だ。」

「？」

「俺がすんげぇちっちゃい頃、雨があがったばかりの朝方、子供だった俺は、嬉しくてはしゃぎながら外に出た。」

レシラムの言葉を遮り、急に自分の昔話を始めるレシラム。

「そこで俺は、俺と同じくらいの高さでいて、俺とは真逆の色をした奴と出会った。そいつを見た瞬間、俺は胸が熱くなるのを感じた。その後、そいつが俺に話しかけてきて、仲良くなった。それから毎日、そいつと一緒に遊んだりした。日が過ぎていく度に、俺の胸はどんどん熱くなっていった。でもある日、その熱いものがなんなのかわかった。そうか、俺はアイツが好きなんだと、自分の気持ちに気付いたんだ。」

「……という事は……。」

ここで一息置いて、ゼクロムが大きな声で――

「レシラム、お前と出会ったあの日あの時あの瞬間、俺はお前に一目惚れしてたんだよ！　その気持ちは今でも変わらねぇ！　俺もお

前が大好きだ！」
「ゼクロム……っ！！」
その言葉を聞いて、ゼクロムに思いっきり抱き着くレシラム。ゼクロムはしっかりと受け止め、抱き返す。
「……こんな俺でよかったら……まあ、なんというかだな。」
「……僕は、ゼクロムじゃなきゃダメなんだ…。」
「レシラム……。」
暫く見つめあう二人。お互い、顔は真っ赤に染まっている。
「……これからも、一緒にいてくれる……？」
「当たり前だろ……？　さっきあんな事言って、今更、嫌だなんて言うと思うか……？」
「……思わないね……♪」
互いの息が相手の顔にかかる。その間の空間が徐々に狭まっていき――
『……。』
二人の間がゼロ距離のまま、暫くの時間が過ぎていく。
「ふぁ……。」
「はぁ……。」
距離が開き、同時に大きく息を吸う。顔はより一層、赤く赤く染まっていた。

「……行くぞ……？」
「……うん。いいよ……♪」
改めて、大きく一呼吸し、二人の距離が、再びゼロへと近づいていく。
そして――

小鳥がチュンチュンと鳴き始め、日が昇っていく頃。激しかった雨もすっかり止み、空には大きな虹が架かっていた。

「んっ……。」

そんな中、ゼクロムが目を覚ました。

「……おっ、虹だな……。レシラム、起きろよ。」
「ふみゅ……？」
「でっけぇ虹だぜ。」
「ふわぁ……ホントだ……♪」

二人で暫く、静かに虹を見つめる。

「……昨日は、」
「ん？」
「昨日は……凄かったね♪」
「……！　思い出させんな……ッ！」
「こんなにした癖に？」
「ちょっ！　何して……」
「ふふふ～♪」
「……しょうがない、付き合ってやるよ。」
「やったぁ♪」

今日も何処かで、二人は平和に、幸せに暮らしている事だろう……。

（後書き）

如何でしたか？
自分の勝手な妄想なので、色々異論はあるかと思われますｗ
うーん、文章力の向上を目指さねば（汗）

……因みに、最後の方で仄めかしたそういう事の内容をｋｗｓｋ読ませて欲しいという方がもし居ましたら……なにもありませんよ、はい。自分のメアドとか知ってたらそっちに……←え
秘匿回線にてその詳細を書いた部分を……←いやいやいやいや

……（汗）←誰かに殴られた
ではっ、感想等お待ちしております！

……皆さんは、映画の白と黒、どちらを見ますか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9075u/

白 黒　―もう一つの存在―

2011年10月9日20時29分発行